

国際・国内動向

「21世紀における交代制勤務」 —第14回国際夜勤交代勤務シンポジウムに参加して—

桂木 誠志

1999年9月13日から17日まで、ドイツ南部の工業都市・シュトゥットガルト市近郊のダイムラー・ベンツ社の研修センター「ハウス・レマーブッケル」で、『21世紀における交代制勤務』をテーマに、第14回国際夜勤交代勤務シンポジウムが開催された。

同シンポジウムは、国際労働衛生会議（ICHO）・夜勤交代勤務委員会が2年ごとに開催しているもので、今回は、カールスルーエ工科大学工業生産研究所・経済学部的主催によって行われた。

シンポジウムには、28カ国の大学・研究機関、企業、労働組合から研究者・専門家など約160人が参加し、夜勤と交代制勤務に関する研究成果が交流された。

日本からは、ICOHのアクティブメンバーである（財）労働科学研究所の小木和孝常務理事をはじめ、佐々木司、森和子の両研究員、産業医科大学産業生態科学研究所の木東明教授と北原佳代氏、（財）京都工場保健会の古木勝也産業保健次長、東京女子医科大学病院の山崎慶子看護部副部長と松平信子、米山万里枝の両氏、聖路加看護大学の豊増佳子助手、筆者の11名が参加した。

以下に、今回のシンポジウムの概要と、各国の夜勤交代制勤務をめぐる動向を紹介したい。

目的とテーマ

シンポジウムの目的は、第1に、企業間競争や技術革新のもとでの操業時間の延長や需要の変化に対応できる勤務体制への移行という課題について、適切かつ革新的な考え方を示すこと、第2に、夜勤交代制勤務のなかで発生する疲労、仕事上のミス、事故などを取り上げて、交代制勤務が労働者の福祉、健康、社会生活にどのような影響を及ぼすのか、さ

らに勤務編成、労働量、労働環境などの調整の効果などを知ることであった。

シンポジウムでは、メインテーマ『21世紀における交代制勤務』と各テーマ（「革新的な労働時間の弾力化」、「革新的な労働時間編成」「覚醒度、作業能力、事故」「生物学的適応」「交代制勤務と健康」「サービス部門における交代制勤務」「交代制勤務と個人差」など）にもとづき、全体会議や分科会、ポスターセッションなどで、各研究者から報告が行われた。

労働時間短縮と勤務シフト

イタリアでは、労働時間の短縮は、生活の質の向上と考えられ、1日、1週、1年、一生という単位での労働時間の調整が行われている。木綿工場における交代制勤務の変遷をみると、1960年代終わりから70年代始め頃は、日勤又は8時間2交代や8時間3交代で、週40時間、年間1750時間の労働時間であったが、80年代終わりから90年代始めにかけては、8時間ないし6時間の3交代や4交代をとり、週34時間から32時間、あるいは28時間、年間1650時間ないし1450時間の労働時間へと大幅な労働時間の短縮と交代勤務の変化がみられる。

労働時間の自己選択制

週35時間労働を達成しているドイツのクライスラー社では、工場別の受注に合わせた労働時間という考え方が採られている。例えば、ブレーメン工場では7.5時間と8時間勤務、ガゲナウ工場では6時間と8時間勤務、エグット・シュタット工場では3交代を中心としたフレックス勤務と異なっており、いずれの工場でも、工場長（マイスター）と労働者の協議によって、労働時間と操業時間が決められてい

国際・国内動向

る。

またスウェーデンでは、経営者の仕事の見積もりを受けて、労働者自身が仕事の種類、勤務日、始業時間と終業時間、休日を自主的に選択できるという「勤務選択制度」(time care)の導入が広がっている。労働者が勤務時間を選択できるこの制度は、「個人化した勤務」とも呼ばれ、余暇、家族、趣味、家事、パートナーなどを考慮した勤務として、仕事と労働時間への満足度を高める効果があるという調査結果が出ている。

雇用重視の連帯制度

スイス・ポスト(郵便事業)では、労働者3人のグループが労働時間を25%削減することで、新たに労働者1人の雇用を創出する「連帯制度」(solidarity-model)と呼ばれる制度が導入されている。この制度は、「多少賃金が安くなっても、自由時間が多い方を歓迎する」として、他の職場(約3200)にも導入が拡大している。

さらにチューリッヒ保健省では、他の省庁に先駆けて「労働時間の短縮」「手当ての代わりに代休」「連帯制度」「ジョブ・シェアリング」「継続雇用制度」「労働時間管理制度」などを勧告し、病院などで試行がはじめられた。スイスでは、歴史的に失業対策としての労働時間の考え方が支配的であったが、最近では、労働時間短縮(削減)は労働の質向上につながるという傾向が強まっている。

これらの制度を報告した研究者からは、「最低所得の保障を強調したい。生活に必要な最低賃金だけでなく、適切な生活水準を保てる賃金と退職後の経済的保障を含むもの」との付言があった。

睡眠不足と作業能力

交代制勤務と眠気、能率低下、ミスや事故の関係、12時間シフトに関する研究も多く報告された。スウェーデンのトラック労働者の調査では、単純で単調な作業や勤務の前に睡眠が不足している場合に、能率低下を引き起こすとの結果が出ており、睡眠不足が作業におけるミスや事故との関連している可能性が指摘された。

12時間シフトの問題では、カナダの電力会社や製油工場、ブラジルの石油化学工場の労働者や、イスラエルの医療機関で働く医師を対象とした調査結果が報告され、「夜勤シフトでは、敏捷性は低下し作業能力も低下する」「昼勤シフトの後の睡眠が、夜勤シフトのそれより、深く、長く、質がよい」との指摘があった。

また、オーストラリアからは、家庭責任の大小に関する看護婦の調査が報告され、家族との関係が良好な人、とりわけパートナーの支えがある労働者は、交代勤務への適応性が高いとの結果が出ており、社会活動や家庭内での活動を重視することの重要性が強調された。

今回は2001年9月・神奈川で開催

今回の第15回国際夜勤交代勤務シンポジウムは、『夜勤交代勤務管理の新戦略』をメインテーマにして、2001年9月10日から13日まで、神奈川県逗子市「湘南国際村」で開催が予定されている。これにむけて21世紀の労働と交代勤務のあり方の研究をすすめ、多くの研究者・専門家の参加を期待したい。

(かつらぎ せいし・日本医労連中央執行委員)